

25) カキドオシ=垣通

カキドオシはシソ科のツル性多年草で北海道から本州、四国、九州にいたるまで、日本各地の道端や空き地、原野などにごく普通に生える。この属は北半球に分布するがその種類は数種しかなく、日本には本種を含めて3種が自生する。カキドオシは日本以外のところではシベリア東部や中国などにも分布する。全体に粗毛があり、細い茎は四角形で、高さは5~25cmほどになる。しかし花が終わる頃になると、茎は倒れて地表を這うようになり、長くツル状となって四方に伸び、節からは根を出す。長い柄のある腎臓形に近い葉は対生して、長さは1.5~3.5cmほどになり、縁には鈍鋸歯がある。春4月ごろ葉腋に、淡紫色の唇弁状で長さ1.5~2.5cmほどの花を数個つける。上の唇は浅くへこみ、下唇は長く、内側には赤紫の斑点がある。和名の由来は、長く伸びた匍匐茎が垣根を通り抜けて広がることに由来し、夏頃には茎が1mを超えることも珍しくない。別称としてはヤマスマレ、モウセン、カジバナなどで、子供の『瘤』を癒すために、民間薬として広く用いられるところから、カントリソウなどと呼ぶところも多い。瘤は筋肉が引きつっていらだつ結果起こるもので、『疝』とは異なるものである。こちらの方の『疝』は子供の慢性胃腸病のことで、この疝をとるといふ説もある。カキドオシが虚弱体質の妙薬とされ、いろいろな病に効くと信じられていたところから、おそらくどちらの説も正しいのだろう。学名は『*Glechoma hederacea*』で、属名はハッカの1種につけられたギリシャ名の『glechom』に由来する。種小辞はキツタ属に似たという意味で、この植物がツル性であることを表現している。イギリスでの呼称は『gill over the ground』だが、フランスでは『gléchome』または『lierre terrestre』である。『gléchome』は木蔦のことであり、『lierre』も木蔦のことで、『terrestre』は地上のという意味である。どこの国でもツル状になって這うところから名付けられたというわけである。因みに中国では葉の形状から『馬蹄草』とか、『連銭草』とか、『積雪草』などとも呼ばれるが、連銭草および積雪草は誤用であるともいわれている。

江戸時代の中頃1709年に貝原益軒によって記された『大和本草』には、『積雪草、湿地に生ず。葉はツボクサに似て円にして銭の如し。茎方なり。』と記されている。当時から薬草として知られ、カキドオシには利胆作用があると信じられていた。漢方での生薬名を『連銭草』(レンセンソウ)と呼んで、煎じて胆石、泌尿器系の結石、肝臓薬として用いられてきた。民間では前述のごとく、子供の瘤(疝)をおさめる薬として広く知られているが、感冒や糖尿にも効果があるとされている。

カキドオシはいたるところで、ごく普通に見ることができる。若葉は食用にもなり、全草に独特の香気の漂うところから、灰汁を抜いてからお浸しや和え物などにして、かつては春の食卓をにぎわした。春の七草や、タンポポ、スイバ、イタドリ、タデ、ホタルブクロなどとともに、昔から若菜の代表でもあったのだ。



カキドオシの花。最も普遍的な雑草であるが、花を近くで見るとなかなか愛らしい。しかし繁殖力は旺盛で、放っておくとすぐに一面を覆い尽くしてしまう(東京都羽村市多摩川べり)。



カキドオシの花(東京都羽村市多摩川べり)。



最近では軽井沢のような寒冷地でもよく目にすることが出来る。

[目次に戻る](#)